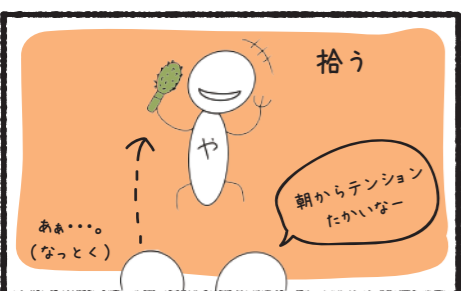
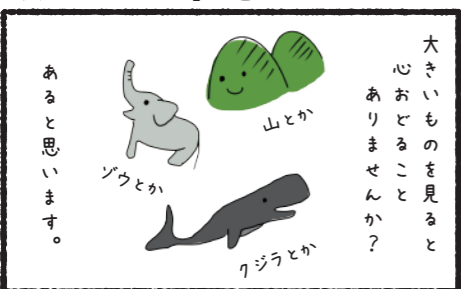


たかおさん

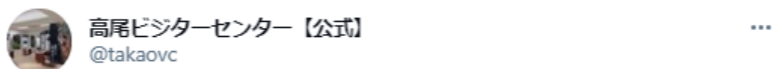
「大きいものが好き」の巻



作・絵：やまもと

Twitterでふりかえる 高尾山ニュース!

高尾ビジターセンターのTwitter・Facebookをチェックしていただいているみなさま、いつもご覧いただきありがとうございます！
山頂の気温や天気、旬な自然情報などを毎日発信しています。
昨年10月～12月の間のツイートから、注目のニュースをご紹介します。



高尾山クイズ第16問！
様々なルートに登れるのも高尾山ならではの魅力です！なかでも舗装されていて歩きやすい1号路は多くの登山者が登っています。さて、1号路の登り始めに見られる敷石はどこから来たものでしょうか？

#高尾山クイズ #高尾山ビジターセンター

①富士山の石	34.2%
②横浜港から絹の道を使って運ばれた石	19.5%
③都電の敷石	46.3%

231票・最終結果

翌日投稿された正解はコチラ！



高尾山クイズ第16問の正解は「③都電の敷石」です。
この敷石は昭和30年ごろまで都電の敷石として使われていたそうです。是非、足元にも目を向けて登ってみると新しい、新たな発見があるかもしれません。

長引くコロナ禍での臨時休館中、Twitterで何か面白いことはできないかと考え、アンケート機能を使った「#高尾山クイズ」を投稿しました！たくさんの投票やコメントをいただき、少しでも利用者の皆様とコミュニケーションがとれたかな？！
「#高尾山クイズ」をクリックして、ぜひ他のクイズもご覧ください！

高尾山に香る思い出

解説員
くらむ
vol.25

春になりあたたかくなってくると、山内には様々な山の香りが漂い始めます。高尾山で日当たりのよい尾根道を歩けば、スギやヒノキといった針葉樹から清々しくも甘い香りが発せられ、辺り一帯が包み込まれます。この香りはフィトンチッドという香気成分によるもので、リフレッシュ効果があるとされています。「森林浴」とはよく言ったものですね。高尾山を「東京近郊で癒しが得られる森林浴スポット」として紹介する記事などもたくさん目にします。

ところで香りというものは、人の記憶とも深く結びついているといえます。先に述べた尾根道の香りは、また別の日、別の場所でも嗅いだとしても、そのとき共に歩いた友の顔が浮かんでくるから不思議です。みなさんにも思い当たるような、記憶に残る香りがあるのでしょうか？

このコラムを書いている3月は、ヒサカキの花が山内のあちこちで独特の香りを漂わせ始めています。たくあんを想像させるやや癖の強い香りですが、毎年必ず、あるお茶屋さんの前で気付けられるため、私の中では「ヒサカキ」あのお茶屋さん」という記憶の回路がすっかり定着してしまいました。この山に漂う香りは、自分の知らぬ間に記憶の深いところで結びつき、これから先同じような香りに出会う度、きつと高尾山を思い出さずのらうと思えます。

(解説員うい)

高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とはムササビの古い呼び名です。

vol.63 季刊
2021年春号

シーズン・イン！高尾山 春のチョウ

豊かな自然が残る高尾山では、春になるとたくさんのチョウが活動を開始します。八王子市で記録されているチョウの種類数は113種類で、その多くが高尾山周辺でも見ることができます。早いものは3月から出始め、季節が進むにつれて見られるチョウは少しずつ増えていきます。

3月



テングチョウ

頭の先にある天狗の鼻のような突起が名前の由来



ルリタテハ

翅をひろげると綺麗な青いラインが目立つ



ヒオドシチョウ

鎧の緋緘(ひおどし)のイメージが名前の由来

4月



ウスバシロチョウ

白いけど実はアゲハチョウの仲間 裏高尾でよく見かける

5月



ミヤマカラスアゲハ

春と夏に現れるが春の方が綺麗！
山内の水たまりやツツジの花によく来る

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて配布しております。ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。

解説員が見つけた!

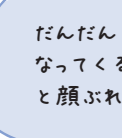
春のチョウたちの記録

	3月	4月	5月	6月
ダイミョウセセリ			蝶	
ミヤマセセリ	蝶	蝶		
ウスバシロチョウ			蝶	
ジャコウアゲハ			蝶	蝶
キアゲハ			蝶	
ナミアゲハ		蝶	蝶	
クロアゲハ		蝶	蝶	蝶
オナガアゲハ			蝶	
モンキアゲハ			蝶	蝶
カラスアゲハ		蝶	蝶	蝶
ミヤマカラスアゲハ			蝶	蝶
アオスジアゲハ			蝶	蝶
ムラサキシジミ		蝶		蝶
フジミドリシジミ			蝶	蝶
ヤマトシジミ		蝶		
スギタニルリシジミ	蝶	蝶		
テングチョウ	蝶	蝶		蝶
アサギマダラ			蝶	蝶
コムスジ			蝶	蝶
ミスジチョウ			蝶	蝶
サカハチチョウ		蝶	蝶	蝶
ヒオドシチョウ	蝶	蝶		蝶
ルリタテハ	蝶	蝶	蝶	蝶
アカタテハ		蝶	蝶	蝶
コジャノメ			蝶	

※6月から新たに見られたチョウは載せていません



3月から見られるテングチョウ、ルリタテハ、ヒオドシチョウなんかは成虫で冬を越すから暖かくなればすぐに活動するんだよね。よく山頂周辺で日向ぼっこしてるよ。



だんだんと春に羽化するチョウが多くなってくるね。3月から5月でずいぶん顔ぶれが変わるね。



ウスバシロチョウは卵、アサギマダラは幼虫、カラスアゲハとかは蛹と、チョウによって冬越しの状態が違ったりするんだよね。

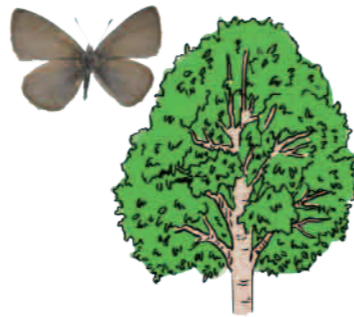
チョウの多さのひみつ

チョウの多くは幼虫のときに決まった植物しか食べず、中には種類の植物しか食べないチョウもいます。高尾山は1300種以上もの植物が自生しているため、たくさんのチョウが育つ環境が整っています。平地にはない植物を幼虫の時に食べるチョウも多く、山に行かないと出会えない種類も少なくありません。



フジミドリシジミ

幼虫の食樹:ブナの葉 (冷温帯の山地に自生)



スギタニルリシジミ

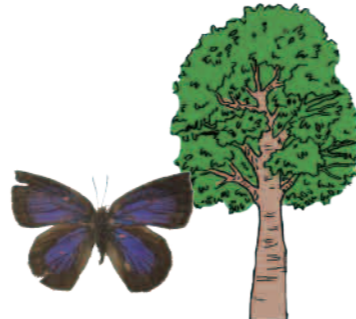
幼虫の食樹:トチノキの花やつぼみ (冷温帯の山地に自生)

高尾山は冷温帯と暖温帯の2つの気候帯の境目に位置しており、北斜面には冬に葉を落とす落葉広葉樹林、南斜面には冬でも葉が残る常緑樹林と北と南で見られる植物が異なります。また、その中間の温帯林(モミ・ツガなどの針葉樹林)も有し、その豊かな植生が多種多様なチョウを支えています。



アサギマダラ

幼虫の食草:キジョランの葉
キジョランは南斜面の常緑樹林に多い



ムラサキシジミ

幼虫の食樹:アラカシなどの常緑樹の葉

まとめ

高尾山周辺の山々では伐採が進みスギなどの人工林が広がっています。一方、高尾山は都市近郊の山でありながら昔からの環境を維持している貴重な場所といえます。今回は春のチョウについて紹介しましたが、季節の変化に伴いこの先現れるチョウもまだまだたくさんいます。この貴重な場所で今年の春からチョウの観察を始めてみてはいかがでしょうか?

(解説員 こばやし)

人々の暮らしが紡ぐ八王子織物

2020年日本遺産「霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」が認定されました。“桑都”と称された織物の街“八王子”と高尾山周辺の集落との繋がりをご紹介します。

高尾山がある八王子は絹織物とともに発展した都市です。現在も「八王子織物」と呼ばれ、ネクタイや呉服の生地として使われています。織物の産物としての起源は滝山城下の市で取引された交換材と云われ、文献では1645年(正保二年)に出された「毛吹草」の中で武蔵の名産品「瀧山横山細嶋」の名で初めて登場します。
「R八王子駅付近は街道沿いという地の利もあり、市町、宿場町として発展しました。一方、高尾山や陣場山など山間の集落は耕作地が狭く、そこから得られる収入は多くなかったそうです。女性たちが行っていた養蚕・製糸・織物は生計を立てていくうえで重要な副業となっていました。
1827年(文政十年)に出された「桑都日記」には、毎月4と8の日に開催された八王子の市や、集落で女性たちがカイコを育てている様子が記録されています。繭から紡いだ絹糸を染め、その後編模様で織るのが当時の八王子織物の特徴で、「編物」と呼ばれ男性着物や実用着に使われました。八王子宿の市には様々な商品が集まり賑わっていましたが、織物の取引が盛んになるにつれて編物は単独の時間帯で取引されるようになり、「編市」に発展しました。桑都日記には、着物の裾をめくりあげ、大風呂敷を背負った売り手と、一段上の台から売り手が掲げる反物を値踏みする仲買商人との様子が活きたことが描かれており、八王子が活気ある織物の街だったことが見てとれます。編市は八王子の周辺集落で織った織物だけでなく、郡内、五日市、青梅、秩父の織物も取扱い、取引範囲は三都、近江、伊勢、尾張にまで及ぶようになりました。

明治以降、八王子の製糸工場が繭を買い集めるようになり、そして大きな織物業者の中には集落の農家に糸を貸し出し、反物を織らせ、賃金を支払う「賃機」という仕組みができ、機織、養蚕はさらに盛んになりました。陣場山へ向かう途中の恩方地域では、「養蚕のさかんな恩方村の蚕飼時には、檜原村の男女が二〇〇人も雇われてきて、糸とりがすむまで滞在したので、この村に最もよい嫁を提供した」と記録があります。また高尾山の麓にある浅川尋常小学校(現・浅川小学校)では、カイコの餌であるクワの葉の新芽を食べてしまうクワエダシヤクを生徒に駆除させる学校行事があったそうです。若い人が多く、桑畑で子どもが遊ぶ当時の様子が想像できます。
戦後、山間部の集落で機織を生業としていた多くの家は廃業し、現在では養蚕をしている様子を見ることができません。それでも北浅川、小仏川沿いを歩くとクワの木が多く見られます。かつて養蚕に使われたと思われる天井の高い家を発見すると、わしやわしやと葉を食むカイコの音や機織りの音が聞こえてくるような…。歴史を知ってからの散歩はまさにタイムトラベル。登山の前に麓の集落も散策してみてください。
(解説員 さとう)

解説員の
ちおし
vol.21

イタヤハマキ
キョウキリの繭

カエデの木にぶら下げられた葉巻

赤いメタリックカラーのイタヤハマキキョウキリの成虫見られたらラッキー

5~7cmくらい

葉巻はできたての時は緑色その後だんだんと茶色に変化していきます

見られる時期:4月下旬
見られる場所:各登山道にあるカエデの仲間の木

(解説員 むらかみ)